

## 薩游稿：文苑

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | ?本, 植   |
| 雑誌名 | 龍南會雜誌   |
| 巻   | 1 3 7   |
| ページ | 9 3 - 9 9   |
| 発行年 | 1910-11-26  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/2298/5943">http://hdl.handle.net/2298/5943</a> |

くのである、運命開拓の作戰計畫に來たのである、實際自分は病みて初めて眞の自己、赤裸々の自己を知る事が出來た病は運命の一大轉機であつたのである、あゝもう自分は悲觀はすまい。たとへ臺灣に行かなくとも天は高くして鳥の飛ぶに任せ、海は濶くして魚の躍るに従はせて居る南洋もあるではないか、と氣をよめなほすと馬車が勇ましく光明の中を急ぐのであると考へらるゝ。あゝ自分は愉快でたまらぬ、今夜萩に泊すれば翌日の十時頃には、あの思出多い瀧の淵を通る。

静江君等はまだもう温泉に來て居るだらうか? ……否々屹度來て居るに違いない。そうしてあの瀧のところまで兄妹で迎に來て居るような氣がしてならぬ。

いつの間にか静江さんのやさしい顔がくつきりと頭腦に浮ぶ。(完)

(十月三十一日稿)

## 薩 游 稿

舊雜誌部長 稼 堂 黒 本 植

余乙未歲八月、歸省、患眼、歲抄少間、乃以冬暇爲慶洲之行、欲以山水爲陳椒也、時學生田千里請同遊、諾、十二月廿九日發、日數一周日、里程五十里、至丙申歲王月五日而歸、余遊慶洲、此行爲始、耳目所觸、有新知想、然余廢筆硯既久矣、故文思空疎、氣亦不振、故此行素無意於吐屬也、且薩南之山、火國之水、山陽賴氏賦詠殆盡、不復須余言矣、而田生出一部含英、構思不已、余見之、宿癖忽動、乃直據胸臆、咄嗟成篇、以畧記鴻爪之所印焉耳、稼堂野客識、

發白川寓

文 苑

病眼萋萋歷十旬、刪文成毒不無因、欲求仙藥在山水、去向櫻洲錦海濱、

舟發松橋

一道大江膏野中、布帆橋外掛長風、滿船總是薩南客、土語牙々奈不通、

望黑富士

奈無嵩嶽拓心胸、只見殘山剩水重、今日聞名亦堪慰、天南擎出黑芙蓉、

過天草洋

芥島洋中灣到灣、巉巖影碎碧潺湲、蕭々落日沉寒水、幕々暮雲補斷山、萬里東寧双眼裏、百盤南海一棹間、

如今誰唱吳耶越、空際孤帆邦城還、

宿米津

平沙連斷港、一路漲痕殘、霜落犬聲冷、驛荒松火寒、飽溫非素好、艱苦是常餐、但怪主人傲、不爲逆旅看、

泉臺道中

米津東去亂峯來、漸到阿嶋眼界開、兩側不看一株樹、如繩大道達泉臺、

過阿嶋嶺、訪河南根心、觀賴山陽遺墨榻本、主人置酒款晤、賦此、併言謝、

危巖亂立大濤間、決晉西南不見山、賴子至此有斯句、朗吟一番徃復還、曾聞有一商隱在此驛、世好風流能待客、賴子淹留連數旬、斷篇零墨存手澤、我得小閑試汗漫、來敲其廬解征鞍、主人青眼起延我、自酌新醅侑午餐、談及昔時賴子墨、何料凌雲筆生翼、飛入東天猶未歸、僅首落翮留南國、良匠苦心幾費工、刻本對照全句空、詞華墨妙天花墜、意氣酣暢吐長虹、賴子當年三十九、既見著書支北斗、溢爲書畫成一家、聲耀長照百年

後、愧我今年歲相鄰、而無成書可示人、漫爲羈官出鄉國、兩髮斑々漸化銀、今觀此卷感不已、更接厚情將愧死、欲作長歌且爲謝、筆鋒鈍劣誰加筆、海嶠南奔勢若龍、雲濤依舊響淙々、此間自有吾師在、安得拓開千古胸、

宿向田驛

客中何寂樂、晚浴傾一抔、斯樂不換公侯樂、陶然伸脚玉山頽、吾宿向田驛、主人勸白醅、里魚擊鮮尤芳脆、山豬截玉更敦晦、世上有錢無脚者、何知此味解兩腮、

薩 暮

薩暮不負名、無筋玉肌清、戶々不言價、到頭相擔行、

市 來

白石青松外、寒潮落日頽、家々清如拭、描出小蓬萊、

移 住

韓人移住之地、故名、今用伊集字、蓋假借耳、

不問先知出自韓、姓名揭戶沈壽官、三百戶中爲巨族、埴得五土製白盤、可憐陶工逐時好、裸婦玩兒費彫剜、何物看來只悅目、萬瓦唯爲尋常看、古帖佐、後御庭、傳家珍襲數碗殘、精雅高古巽然異、果識古今相及難、上無勸賞下無眼、品格日降堪浩歎、嗚乎何人爲砥柱、超然拔俗挽頽瀾、

發移住院

驛林々外夕陽春、路轉溪南飛嘯重、未到鹿洲三四里、旣見櫻島一尖峯、

入 鹿 洲

滿腔壯氣迸難收，今日圖南志始酬，七寸草鞋十三里，浩然踏月入麴洲、

除夜

萬里颺然意氣豪，年光只惜去滔滔，推窓遙望無窮感，百二都城皓月高、

丙申元旦、書懷

街上鐙々車馬塵，向吾誰是賀迎新，一抔琉璃思屠散，七草餅盤認今辰，錦水日暄梅唇發，鶴山風暖柳眉伸，今年窃喜外征羅，海內初生萬戶春、

登城山

北控邱陵南太瀛，一夫荷戟抗千兵，霸圖餘韻人渾勇，王化流風俗自情，霜劍氣寒錦江戍，煙波影暖鶴山城，典刑在此治安了，何說漢庭用賈生、

麴洲雜詞、六首

一望蒼茫不見山，鹿門中斷錦灣環，我來自覺南遊遠，隔海流蚪是此間，壘石成門兀透迤，九衢如砥接津涯，一鄉窃感民風厚，壻外黃橙垂滿枝，武勇儉勤風自成，此中窃愛少年生，高寒短褐杖青竹，十字街頭濶步行，兵子爲團謀協同，箕裾長幼坐春風，琵琶一曲叫聲裡，不識陶溶幾老雄，憶曾此處戰聲雷，今日猶存舊砲臺，一擊更開一生面，養成海國健兒來，百戰骨埋三尺墳，先生名擅敗將軍，光明寺畔人如織，千縷香煙一院雲、

穀木道上

永安橋外出秦關，打岸風濤聲自閑，一望恰如晚秋候，白雲黃葉夕陽山、

又

山陽貪利涉、五里買舟行、吾爲試健脚、踏破半日程、

望老虎嶽十八音

嶽影雲間落、寒色照九原、剛風吹不盡、噴煙天際奔、中有白鳥嶺、峻拔刺天根、羣嶂遶其趾、俯伏若兒孫、憶昔三千載、皇孫翻雲旛、天降臨下國、始關經緯源、山河繫渾沌、陰陽割朝昏、威風禽獸伏、仁雨草木繁、歷世積聖德、一系肇軋元、累葉傳神器、風教貴不言、迺成勇鬪俗、迺毓皇和魂、萬邦曾無類、淵源實茲存、吾爲觀光客、南鞍又北轅、林際隔溪仰、儼若對至尊、誰居問聖蹟、逆鋒雲吐吞、邈矣三皇陵、無人薦蘋蘩、却見人臣祠、丹碧照乾坤、高哉老虎嶽、深哉神國恩、

宿橫川驛

晚投不得浴、兩脚冷於鐵、窓外月如水、屋上霜爲雪、

曉發

曉暉未到水之涯、寒霧蓬々罩白沙、下瞰千尋斷崖底、一溪枯木着霜華、

踰吉田嶺

五十餘程長短亭、吉田嶺上日冥々、薩山旣斷肥山續、穿眼天西一髮青、

致江舟中賦示同行田生

聞說古人登東山小齊魯、又聞一觴渡大江醑神禹、名山大川秀靈鍾、一試跋涉氣萬肚、我丙申孟春初之五、南遊薩隅窮深阻、歸來僦舟下玖江、開眼始洗南中苦、大霧四塞來蒼莽、忽失吉城數千戶、江面一色變重溟、恍訝身在廣寒府、舟客十人各相僂、疎篷擁舷無所覩、濤聲遠動坤軸來、轟然澎湃濺風雨、漸過五里見天宇、回

首中流舟掀舞、忽爲奔瀾忽恬波、怪巖噴雪互春拊、恰若白龍之逆流而發衆煦、更似神獸之騰浪以相吼怒、  
奇倒翁絕壁所、逆折盤廻吞復吐、會聞相族過此許、假鎗肅然如履虎、積鐵虛懸垂欲零、不識何世施鬼斧、  
子一棹巧相挂、操縱轉圜輕於羽、激湍直下不知難、反顧來路速似弩、舟到入城時正午、一道雲波湧遠浦、  
碧石白禽影双、江淨水明魚可數、如何此行短髮垂氷挂、江風凜冽砭肺腑、賈客環坐不足談、田生怕寒亦相俯、  
我欲動河伯獨拊股、無奈凍筆勢自侮、他日願再餘勇賈、桃花流水弄柔艣、七十八灘浮巨觥槌石鼓、一氣呵  
吐雄句傳千古、

堤上口占

朝下飛峯百折間、江聲夕響如雷、八城堤下繫舟處、寒日猶懸蒼島山、

渡綠川

四郊漠々榮芽肥、轍去汽車如鳥飛、一脈綠川春浪漲、鴨頭欲染舊征衣、

入熊基

自發熊基過半旬、薩南踏遍碧嶙、胸眼中恐復生雲霧、一望浮空十丈塵、

歸寓

下車春日驛、既及夕陽低、歸來解破轍、掃塵入舊栖、主婦迎如母、家婢侍代妻、云昨片書至、今日朝來溪、  
先敘賀新禮、更叙謝舊辭、偏喜有春盤、却羞無輕齋、一杯酒潮面、半碗茶到臍、病眼幸生白、蒼顏忽變鰲、  
旅中談不盡、談餘轉悽々、阿孃待吾久、山妻獨守闈、珍菓不能贈、愛兒不得攜、天涯兩相憶、雲海渺々兮、  
吾生何多艱、待養歲月賸、後悔其可及、遂時日傾、西思之又思之、惻然客心迷、飲罷不成醉、欲兒女啼、

年春風路、落花送馬蹄、

明治四十三年十月十日第五高等學校  
開校第二十回紀念式をこほきて

松浦校長閣下に奉る

元本校助教授

園

哲

雄

あはれ此の世は

ことほげば

事を榮ゆる

わが國は

神の國なり

言靈の

さきはふ國ぞ

あはれ此の

まなび處は

明らかに

治まる御代の

二十

三年の今日に

立ち初めて

早二十年に

なりけりな

此處より出でし

千萬の

いみじき人の

逸早き

手わざによりて

國の名を

臺灣島の

新高の

山は物かは

ゆふつけの

どりの林も

悉く

服従ひ附きぬ

然れば彼の

まかくしくも

あち驚を

うち罰めてし

戦の

中に聖の

言ひけらく

わが兵の

強きには

教官の

教へつる

事よきにより

つよきよこ

言ひしを事の

實なる

いふもながく

をこなれど

やつがれすらも

十あまり

四年そこそに

つとめてし

をりにふれては

拙くも

文苑